

3章まとめ(4)
第5節 こどもの空間認知能力の発達と促進法

| | | | |
|----------------------|-------------------------------------|---|--|
| 1. 幼児・児童における未来型能力 | 必要な能力 | 外界を認知する能力 | |
| | なぜ未来型能力か？ | 人がこの世に生を受けて、豊かな人間性を育み、いわば「人らしく」生きていくためには、自らを取り囲む外界からの様々な刺激を認知し、必要な情報を適切に取り込み、適応していく必要がある。＜外界＞については外界の物理的なモノと社会的な人間について考えていく。 ●物理的なモノ・自然界の視聴覚情報 例)光や音、水や緑、動物 ・人工的な物体 例)乗り物や機械音、椅子やボールなど ●社会的なヒト・他者 例)家族や、幼稚園の先生、友人 ・客体化された自分の姿 例)写真やビデオの自分 ※外界を認知する能力には、・対人認知能力、社会的推論、コミュニケーション能力も含まれる。 | |
| | 具体的な能力 | 空間認知能力：身体活動の基盤となる外界の中での自身の身体の位置づけの理解に必要な能力。 | |
| | | 【前後の空間課題】 測定される能力：視点取得に関するものと位置づけることもでき、自分以外の視点から物事をとらえることができるかということと関連した空間認知能力。 | 【空間移動課題】 測定される能力：自己の足跡を認識できるかに関するものであり、自己の認識の問題とかかわる空間認知能力 |
| 2. 幼児・児童における未来型能力の育成 | 現状の把握 (当該領域のオリジナルデータ・知見) | 【前後の空間課題】 子どもと実験者役の大人およびボールの三者で4つの空間関係のパターンを設け、ボールの位置を移動させ、子どもにボールのある場所を、自分の前か後ろか、あるいは、先生の前か後ろか回答を求めた。 [3歳児] ・全問正解は0人 ・子どもや実験者のすぐ前やすぐ後ろ、に関してはほぼ正答 ・間に人が入ると正答者が少なくなる ・間に人が入った場合、「先生の前」「先生の後ろ」の正答者数よりも、「子どもの前」の正答者数が多い→自分主体の場合の認知がやや先に進む [4歳児] ・8名中3名が全問正解 ・4名が間に人が入る事で、「ない」と答える →間に人がいるのだから、前や後ろに「ない」という答えも、子どもなりの考えによるもの。自分で考え、答える力が芽生えて来ている。 [5歳児] ・8名中4名が全問正解 ・3、4歳児に比べると、間に人が入っていても、大きな空間の中では、前、あるいは後ろ、という位置関係を捉えられるようになってきていると考えられる。 | 【空間移動課題】 子どもに目隠しをして、実験者が手を引き、L字あるいは四角くに歩いた。次に、目隠しを外して、「どこから歩いて来たか？」答えること、今歩いたとおりに、「もう一度歩くこと、図が書いてある4枚のカードから、道筋通りの形が描かれているカード(「L」型、「△」型、「□」型、「4」型)を選ぶことを求めた。 [3歳児] ・やや難易度が高い ・答えない子供も ・答えるまでに恥ずかしがり時間がかかる [4歳児] ・スタート地点の指摘の正解者は、ほぼ半数 ・道筋はほぼ理解、再現できる [5歳児] ・正答率が低い →複雑な道のためか？ ・自信を持って回答 ⇨坂元(1985) 3、5歳児が自信を持っている |
| | 育成方法の提案・実施 | 保育の場面で比較的に簡単に行うことができ、なおかつ、子どもの空間認知能力に関する特徴をとらえることができる課題を提案 | |
| | 育成カリキュラム実施の結果 (当該領域のオリジナルデータ・知見) | 未実施であるが、子ども達の空間認知に関して、前節(3章4節)で取り上げた同時的処理タイプの子どもの得意な子どもと継次的処理タイプの子どもの得意な子どもとは、空間認知のとらえ方がどのように異なるかについての検討を行っていくと、個々の子どもの特性に応じた空間環境への適応の仕方について考えていく上で参考になると考えられる。 | |
| | 現状の把握 (当該領域のオリジナルデータ・知見) | それぞれの子どもたちの日頃の様子を観察し、空間認知と空間移動について、身体運動の面からも検討できるようにしていきたい。 | |
| 3. 未来型能力を指導できる指導者育成 | 育成方法の提案・実施 | 園舎内の保育室や園庭など園内の種々の保育施設の特性を活かした空間認知課題が計画できればと考えている。さらには、地域の商店街や公園、家と園との通園路も活用できればより生活に密着した空間認知課題が計画できると考える。 | |
| | 育成カリキュラム実施の結果 (当該領域のオリジナルデータ・知見) | 未実施であるが、上記のような課題を行うことにより、物理的なモノのとらえ方だけでなく社会的なヒトに対する認知やコミュニケーション能力の育成できればと考えている。 | |